



Title	俳句学習の可能性
Author(s)	小林, 可奈子
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2012, 10, p. 23-37
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10999
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

俳句学習の可能性

小林可奈子

【要旨】

本稿は日本語での俳句実作と鑑賞を指導した15回の授業の報告である。季語と、別の事物の取り合わせというパターンのな作り方を示し、持ち寄った句を出して合評会を行った。半期を通して、一人平均9句を詠み、1クラスの発表俳句総数は70～80句に上った。

一句の中に一ヶ所「切れ」がある。句読点を使わない俳句表現において、一ヶ所だけ「切れ」を持たせ、「切れ」を読み取るためには、何となく単語を並べるのではなく、助詞の正確な理解や構文力が重要になることがわかった。日本文化理解の面では、画像・動画サイトを閲覧して、季語を提示することを試み、成果を上げた半面、画像・動画に依存し過ぎた例もあった。

1. はじめに

担当する上級作文の授業において、日本語での俳句実作と鑑賞を指導した。本センターで開講される上級作文とされる科目のうち、アカデミックライティングを扱う科目が多数を占める。日本語で論文やレポートを書くことが課される学生にとって、そのニーズも自ずと高いと思われる。

それに比べると、俳句を作ることは必要不可欠な練習とは言えない。そのような科目を進んで受講するのはそれなりの興味を持つ学生が多いのではないか。また、必須の学習内容ではなくても、俳句に対する理解を深めることは受講生の日本語力を豊かにすると考える。日本語俳句の実践を通して見えてきた収穫と課題を本稿で考察し、報告したい。

2. 俳句教育の意義

2.1. 俳句の学習歴

俳句を継続して指導する例は少数かもしれないが、単発的な形で取り上げることは珍しくない。何をどのくらい習ったかは所属教育機関や国による違いも大きいですが、読解や文法など、俳句と直接関係のないクラスを含め、多数の学生に尋ねてきてそう実感した。¹⁾

2.2. 先行文献にみる俳句教育の意義

上迫1992は俳句教育の意義として次の3点を挙げている。

1 日本語のリズムを知る

俳句の五七五は次に示すように四拍子でリズムを構成しており、日本語の「モーラ拍のリズム」の典型的な表れ方である。(中略) 日本語のリズムを知ることは日本語らしい発音を獲得していくために重要なことであり、このような形で日本語のリズムを示し、関心を持たせ、理解させることができれば、大きな意義を持つことになる。

2 日本文化への興味を喚起し理解を促進する

インドネシアの学習者が「袋掛」という季語を知り、それが自分の国にもあるという

ことから、日本人の生活への興味をより強く持つようになったことがあった。また、「蛩」に対する感覚の共通性や「蟬の声」への全く違った感じ方を通じて、日本人の自然観に興味を持つ南米系の学習者もいた。

3 コンテキストへ関心を持つ

(高浜虚子の「流れ行く大根の葉の早さかな」を引き) この俳句で構造上示されている意味は「驚きを感じる程の早さで大根の葉が流れて行った」ということである。しかし実際には、大根が流れているのは川面で、上流の方では大根洗いをしているであろうことなどが、わかる人にはわかる。(中略) 学習者がコンテキストについて考えるための第一歩は「コンテキスト」というものの存在を意識することであり、俳句の解釈で17音の周辺にあるものへ思いを巡らすことでコンテキストへの関心を高め、コンテキストへの依存度が高いという日本語の特質(例えば英語との比較で)の発見・理解へと進んでいく。

佐藤1995は初級と中級学習者への二回の授業の報告で、「長音、拗音、撥音、促音の正しい拍の取り方及び日本語のリズムの教育を大きな狙いとした」と述べている。中級学習者に対しても「長音、拗音、撥音、促音の訓練は有効」とした上で、「想像力や感性など別の要素が必要になってくる」、「俳句のクラスが日本語や日本文化に対する理解を深める機会になるかもしれない」としている。

「日本語の拍とリズムの体得」は上迫1992の1と、「日本文化の理解」という点は同論の2と重なると考えられる。

上迫1992の「俳句教育の意義」3点に対する本稿の立場は次のとおりである。

1の「モーラ拍のリズム」について、特に初中級の学習者にとって、俳句指導は特殊拍の独立性や音節の等時性を学ぶ一手法になりうると思う。この授業では対象者が上級レベルに設定されていることもあり、モーラ拍感覚の向上は特に目標にしていない。ただ、俳句の二大ルールの一つは五七五であり、五音七音のリズムが日本語に非常になじんだものであることを重視し、いわゆる定型の重要性については繰り返し指摘した。

2の「日本文化の理解促進」はこの授業でも、目標の一つに数えている。「豆撒き」「七夕」など代表的で取り上げやすい文化項目は、学生も何らかの形で経験している。また、「蟬の声」「虫の声」など自文化で注目されなかったり、プラスイメージを持たなかったりするものが、日本では季節の風物詩とされていることも知っている。学生たちが既に知っていそうな項目より、見過ごされやすい文化的差異に目を向けるようにした。

3の「コンテキストの意識化」に関しては、近い立場をとる。字数が極端に短い俳句は、ハイコンテキストとされる日本語の中でもその特徴が最も凝縮された形式だと言えるだろう。直接書かれていないことにも想像を広げ、読みとめることは俳句の鑑賞上確かに大切である。読みを深めるために、授業の少くない時間を当てた。

開講時に示した授業の目標は次の4点である。

1. 俳句の感想を語り合い、鑑賞とコミュニケーションを深める。
2. 自作の俳句作品を形に残す。
3. 類義語など、単語の意味、ニュアンスの違いを学ぶ。
4. 俳句の実作・鑑賞を通して、日本文化における季節感に親しむ。互いの季節感を比べる。

授業の開始前は「日本文化の理解促進」や「語彙の強化」を意識していた。俳句を通して、

日本語力の枝葉が豊かになることは期待していたが、日本語力の幹に当たる文法面への影響は特に想定していなかったのである。しかし、実際に回を重ねるうちに、俳句学習は文法力とも密接な関係があるのではないかと考えるようになった。両者の関係について4章で具体的に考察する。

3. 授業の概要

3.1. 開講学期と受講生

2009年度・2010年度春学期の授業を考察の対象とする。受講生の内訳は次のとおりである。

09年度：インド1名（男性）、ドイツ1名（男性）、韓国（男女各1名）スウェーデン1名（女性）、ポーランド1名（女性）、ベトナム1名（女性） 計7名

10年度：中国（男女各1名）、オランダ1名（女性）、リトアニア1名（女性）、スウェーデン1名（男性）、イギリス2名（男性） 計7名

3.2. 授業の展開

3.2.1. 授業の内容（第1・2回）

初回は時候・天文・人事（生活）・植物・動物各種の季語を各自で四季に分類してみて、その後答えを合わせることから始める。次に、当季の季語のリストに目を通し、最後に授業の目的、内容、評価について確認する。

2回目で、俳句の構成を扱う。俳句の構成は大きく二つに分けられる。

P型：一つの事物だけを描く構成

PQ型：二つの事物を組み合わせる（＝切れがある）構成

P型、PQ型とも用語は筆者による。PQ型はPとQのうち、どちらかが季語である例が多い。季語でないもう一方を「材料」と呼んだ。それぞれ一例ずつ挙げる。²⁾

（1）初燕そらの鏡を割ってくる P 安藤 涼二

（2）新宿は垂直の街初燕 PQ 堀部 節子

俳句の表記に通常句読点はいらず、分かち書きもしない。したがって、意味の切れ目を示す視覚的な目印がないわけだが、読み慣れれば、文脈に基づいて切れを探することができるようになる。上の（1）（2）を例にとると、（1）は「初燕がそらの鏡を割ってくる（ようだ）」という一文に組み込むことができ、句全体が述語「割ってくる」にのっての補語でできている。それに対し、（2）の「新宿は垂直の街」という把握と、「初燕」はそのような構成ではなく、構文上、両者に直接の関係はない。

（1）（2）の構成の違いが納得できたら、別の三句を示し、「意味の切れ目」があるか、あれば、どこにあるかを考えさせる。

（3）メンデルの父もメンデル豆の花 塩見 恵介

（4）つばめ来る神話の笛を吹くごとく 中田 美子

（5）鉄格子からでも吹けるしゃぼん玉 平畑 静塔

（3）はPQ型、（5）はP型の例である。その他（4）のように「神話の笛を吹くごとくつばめ来る」という本来P型の語順を倒置した結果、句の途中で区切れのあるP'型のようなものがある。この段階で、内容を鑑賞する余裕は受講生にまだないが、構成が二種類あるということは

頭に入る。

また、構成の明示的な区切りとして、「や」「かな」の切れ字が手掛かりになることを例とともに示しておく。「や」は切れ字として余情を醸すだけではなく、「囀り」のような4拍の季語を上五に置く時に「囀りや」と韻律を整える効果もあり、受講生たちの作品にもしばしば登場した。

3.2.2. 授業の内容（第3・4回）

第3回から、「今週の季語」として当季の季語をいくつか取り上げ、紹介を始める。たとえば、下のように簡単な説明だけで済ますものもある。

若葉風：桜が終わった頃から木々の緑は美しく鮮やかになっていく。その緑を吹き抜けるような心地いい風

一方、もっと踏み込んだ提示をする季語もある。「揚花火」については「日本では主に夏に花火大会がある。何かのイベントの添え物ではなく、打ち上げ花火を鑑賞することが夏の夜の娯楽である」という特徴、さらに「美しいが、すぐ消えてしまうはかなさが愛されている。明るい楽しさだけでなく、暗い情念が連想されることもある」という含意まで示す。

それとともに、先行作品でPQ型に当たる俳句を紹介し、発問によって、より深い鑑賞へと導くようにする。読み手は作者の意図をはなれて、自由に観賞しうることや、読み手によって同じ句に対する解釈が違って構わないことも伝えていく。解釈に「間違い」や「絶対の正解」はないと伝え、第5回以降の句会へ向けて、自分なりの発言が出せる雰囲気作りを心がけた。

また、季語を伏せて12字だけを示し、それにちょうど合うと思う季語を選ぶ練習もする。たとえば「新米の医者沈黙」という材料に対して、「この後ろに季語が続きます。一番合う季語を次の三つから選んでください」と言って「ヒヤシンス」「花吹雪」「鯉のぼり」を示す。それぞれを組み合わせた場合について、学生から意見や理由が出る。

最後に、実作に先立って、自分の俳号をつけるよう指示する。俳号はひらがなでもカタカナでもかまわないが、できれば少しでも本名とは違う方がいい。本名の発音に近い漢字をあてたり、漢字圏出身で苗字の漢字表記をそのまま使ったりする学生もいれば、凝った俳号をつける学生もいる。ポーランドの学生は好きな花である菖蒲を使い、瀬菖（らいしょう）と名乗ったが、瀬の辺に咲く菖蒲を思わせて粋な俳号である。他には、柊の意味を持つ自分の苗字と、出身国であるイギリスを組み合わせ、英柊（えいしゅう）と名乗った学生もいた。こうして短期間ではあるが、俳人としてのアイデンティティを意識し、ひいては受講生同士の関心を高めるきっかけにする。俳号を全員で確認したら、以後は俳号で呼び合うことになる。

3.2.3. 授業の内容（第5回以降）

第5回に先立って、未完成でも自作を作って見せ合おうと呼びかけておく。定型や季語のルールに沿うかどうかはともかく、自分なりに作ってくる学生が多い。授業の進行は次第に下のよう流れに固まる。

- a 前回出た句への講評・フィードバック
- b 作者名乗り
- c 季語の紹介や作句上の注意点の確認など

- d その回の句を短冊に書いて提出（作者名は伏せる）
- e 清記（学生たちと分担して縦に板書）
- f 出句一覧から好きな句、気になる句を2句選句（自作の俳句は選ばない）
- g 高得点の句の順に、選んだ句についてコメント

上のうち、d～gとbの行程を句会と呼ぶ。この授業ではフィードバックをできるだけ聴き落とさないよう、出句一覧と選、講評をタイプして配布した。自分の句を誰が選んだか、どの句が高得点句かは授業中にわかるが、作者の名乗りは次週まで持ち越しとした。

3.3. 課題

毎週の課題は次の二つである。

- ①句会に出す俳句を1句考えてくる。
- ②abのどちらかについて、400字程度のレポートを提出する。
 - a 読んだ俳句について、合評前と合評後の感想を比較しながら書く。
 - b 日本と自国で季語観の違いがあれば比較して書く。

②のねらいは四つある。授業中にすべてのコメントを引き出す時間がない分、課外でじっくり考えてコメントを言語化させること、書かれたコメントから、受講生の「俳句の読み」の広がりなどを把握すること、そして、俳句ではない通常の日本語のアウトプットを定期的にチェックして、語彙・文法上の強み、弱点などを把握することである。そして、講師側からもコメントを返して不足を補ったり、ほめたり、励ましたりする。

期末の課題は次の二つである。

- ①学期中に作った全作品リストを提出する。その中で自分の代表句を5句選ぶ。
- ②他の学生の詠んだ俳句を6句ほど選び、評を書く。

この二つを講師が編集し、作品アンソロジーに掲載する。詳しくは次章7節で紹介する。

4. 実作と鑑賞から見てきたこと

4.1. 俳句構成のインプットとアウトプット

3.2.1. で述べたように、俳句の構成はP型と、PQ型に分かれる。この授業では、12字の材料を探してから、それとバランスがよいと思われる季語を選んで組み合わせるPQ型の句作を指導した。バランスがよいというのは材料と季語との関係が重なりすぎず、遠すぎず、程よい距離感があるとも言え換えられる。両者が直接には関係ないが、組み合わせると通い合う感じがすればちょうどいいバランスである。（6）は「五月雨」と「濡れる」が重なっていて厳密に言えば、二つのバランスが近すぎる。

（6）五月雨濡れた思い出忘れつつ（10年度）

PQ型を推奨するのは、初心者が俳句を作ってありきたりに終わらず、一定レベル以上の作品を生み出す可能性がP型よりPQ型の方が大きいからである。PQ型は「取り合わせ」と呼ばれ、一般の実作入門書でもよく採用されている。

この構成の指導はできた句にどのくらい反映したのだろうか。表1は09年度の、表2は10年度の出句の構成を示したものである。出句の段階（推敲前）で数え、両型の間断的で判断のつけにくい句を除外した。³⁾ 表中の「句会番号」は毎週の句会を時系列の順に並べたものである。

表 1

句会番号	出句総数	P型	PQ型
1	12	5	4
2	9	5	1
3	10	5	4
4	9	1	5
5	9	3	4
6	5	2	2
7	9	1	6
8	8	1	6
計	71	23	32

表 2

句会番号	出句総数	P型	PQ型
1	6	0	6
2	10	0	10
3	9	3	4
4	9	1	5
5	8	0	6
6	10	0	8
7	10	0	7
8	7	0	5
9	7	0	3
10	9	1	5
計	85	5	59

実際に受講生が作って出す俳句はP型の句が少なくない。表1を見ると、前半から後半へかけてP型が減り、PQ型が微増している。表2からは一貫してPQ型の方が多かったことがわかる。この集計からは、PQ型で作ろうという呼びかけが浸透したように見える。では、構成の変化につれて質の変化があったのだろうか。数字で測れない部分になるが、次節でみていく。

4.2. 季語と構成との関係

受講生の作品を見るうちに、あるタイプの季語と作られる俳句の構成には傾向があることがわかってきた。PQ型で作れと言われていても、ある季語を使おうとすると、他の材料と組み合わせるより、P型の句が作りやすいのだ。たとえば、人事（生活）の「サングラス」、食べ物の「トマト」、動物の「かぶと虫」などは、全く別の材料と組み合わせようとしても難しい。季語自体の実質的意味がはっきりしているからだと思われる。「トマト」「かぶと虫」などが登場する俳句は最初から「トマト」なり「かぶと虫」なりに注目して作り始めることが多いのである。そこへ別の事物を組み合わせるのは過剰である。

(7) あお向けに空を支えるかぶと虫 (09年度)

(7)は「かぶと虫」の様態が詠まれていて、それ以外のことは書いていない。二つの事物の組み合わせではなく、P型の俳句である。比較のため、同じ季語を使った別の俳句を参照する。

(8) 風にのるアスファルトの香甲虫 (10年度、推敲後)

「アスファルトの匂いが風に乗る」とことと「甲虫」の間には関係がありそうにも思われる。とはいえ、ひとまず両者は互いに独立した事物である。「かぶと虫」という実質性の強い季語を用いてPQ型の俳句が作られた例である。構成は違うが、(7)(8)どちらも力作だと思う。(7)は発想が詩的だし、(8)は「アスファルト」という人工の物と自然の虫を対比させて、効果を上げている。ただ、(8)は結果的によくできているが、実質性の明確な季語をPQ型に合わせてなかなかこううまくいくものではない。

それに対し、PQ型の俳句を作りやすい季語は、「春の空」「若葉風」「遠き雷」などの時候・天文の季語である。これらの季語は実質的意味が強すぎず、「背景」的性格を持っており、材料を12字に整えたところへ組み合わせやすい。

(9) 遠雷や涙を吞んで酒を飲む (10年度)

(10) 皐月雨古いアルバム開いたまま (10年度)

(9)(10)の「皐月雨」「遠雷」は後続の材料に対して背景的に組み合わせられている。型のおかげで、それなりの水準の俳句となっている。いい句ができればP型PQ型どちらの構成でもいいと言えば、何のための区別かと思われるかもしれない。が、前もってPQ型の構成を意識させないと、たとえば「失恋し涙を吞んで酒を飲む」「懐かしい古いアルバム開いたまま」のような説明過剰で散文的な句になりやすい。17拍のうち、5拍を別の事物（この場合は季語）のために空けておき、材料を12拍に収めるのはこういう句を防ぐためでもある。

PQ型の構成を推奨すると、取り合わせやすい背景タイプの季語が使われがちで、さまざまな季語を紹介しても、似たような季語ばかり使われる傾向があった。ただ、種類が限られていても、季語を的確に使って一句に仕上げるという達成感も大切だと考える。提示する例句の影響は大きいので、どんな句をどう例に挙げるか、検討を続けたい。

4.3. 助詞の脱落

散文の日本語では、述語は文末に置かれ、補語は助詞で示される。それに対し、俳句では倒置が起こるし、助詞が落ちることも多い。助詞の脱落は主に拍数を揃えて定型に合わせたり、格調を高めたりするために起こる。

ところで、助詞の脱落には規則性が見出せる。「アルバムが開いた」の「が」は脱落可だが、できない助詞も多い。

(11) 雨上がり子どもの庭のぼたんに蟻 (09年度)

は「ぼたんに蟻」が6拍だが、「に」を落とすと意味がとれなくなる。脱落してもいいか、できないかは、主に助詞によって決まっている。このような差異を教わる機会はないだろう。上級レベルで勉強する学生たちは自然習得などにより、脱落の判断を身につけているのだろうか。

2010年度の授業の実作開始後3週目に、下記のタスクを試してみた。1～6の表現が俳句に使われた場合、()の中のひらがなのうち、なくてもかまわないものを選ぶという問題である。ここでは拍数を考慮せず、文法的な差異だけを問う。

1. あそこ(で)蛙が鳴く

2. 虫たちが陰^{かげ}（に）いる
3. 鳥が人（を）からかって
4. 人々がこの道（を）歩く
5. 山（が）静かです／静かなり
6. 私が兄（と）出かける

「が」と「を」だけが脱落可であり、他のマーカーは脱落すると不安定である。⁴⁾ 大まかになら見当がつくかもしれないと予想したが、受講生たちの選択はランダムであった。そこで、「が」「を」と他の助詞の脱落の違いを示してから、参考としてとりたて助詞の付加について考えさせる。格助詞に「は」や「も」が後接すると、「とは」「にも」などの形になるが、「が」「を」だけがとりたて助詞の付加によって脱落する。それを思い出すと、納得がいくようだ。助詞の脱落を考えることは実作で役に立つと同時に、助詞の役割の重要度を確認する機会ともなった。

4.4. 拍数と推敲

五七五を意識して作っているが、語彙や構文面で折り合いがつかず、字余りの句も珍しくない。

(12) 春の宵や沈黙を破る蚊の声 (10年度)

「沈黙を破る」は上級らしい表現だが、8拍あり、韻律がややゆるい。「を」は脱落するので、「沈黙破る」とすれば意味の変化なしにリズムが整う。この句は下五も1拍足りないので、「蚊が一匹」という結び方を提案した。

(13) 揚羽蝶訪問してきた雨上がり (09年度)

「訪問してきた」だと、やはり8拍である。ほとんど同義の「訪れてきた」「訪れてくる」を提案し、声に出して、リズムのよさを比べてみた。

もちろん、字余りでもすべて五七五にできるわけではない。(11)の「ぼたんに蟻」という6拍は句の内容を変えない限り、5拍にはできない。最優先するのは文法性であり、それを守りながらできるだけ定型に収めるのがいい。語順を変えたり、言い換えたり、助詞を落としたりすることで、きちんと五七五に整えれば詩的になり、引き締まる。

ところで、定型に沿わないリズムが生きるような内容の句もある。

(14) 汚れた足は水たまりに飛び込む (09年度)

(14)は自由律に近い。たとえば「水たまり汚れた足も飛び込んで」などと五七五に推敲することはできる。が、この句に描かれた奔放な感じや勢いにはむしろ原句のリズムの方が合うのではないだろうか。鑑賞した学生も作者本人も「原句のままだいい」という感想だった。

(15) 一人部屋待ち人来たらず桜散る (10年度)

五八五の拍数である。8拍の部分が7拍になるような言い換えを複数提案したが、「待ち人来たらず」というフレーズが気に入っていてこのまま使いたいという作者の気持ちは変わらなかった。文法の間違いでなければ、推敲してどう仕上げるか決めるのは作者である。この句はこのまま期末に提出された。

このように、定型の字数は絶対のルールではないので、字余りの句の一拍の収め方をめぐって、学生たちの迷いは小さくなかった。声に出して読んだり、実作・鑑賞を重ねたりすることによって、徐々に五七五の調べになじむようになった。

授業アンケートに最も詳しく記入した回答者は、五七五について、「そのリズムはいい感じし

ます。でも、こまる時もあるって、言葉はどうしてもその型になりませんでした。長い間俳句を作っていた人はたぶんそのリズムを身に付いて、材料が思い浮かぶとともに5・7・5の型も自然に出るかなと思います。」と記入した。

4.5. 文法面の指導

この授業では、通常の作文の授業のように語彙、活用、接続などの誤用を指摘、訂正した。

(16) にちようびの穏しき夜くじゃくの音 (10年度)

(17) 星ごとく心の絆蟬の声 (10年度)

(18) 君のことけっして忘れぬ床屋行く (09年度)

(18) の句は、「忘れぬ」と「床屋」の間でいったん切るという作者の意図を明確にするには、「忘れぬ」の「ぬ」を「ず」に変えた方がいいだろう。打ち消しの「ず」の活用について確認した。

個別の誤用訂正以外に、継続して注意を呼びかけた点がある。材料を一続きにつなぐことである。PQ型は「二つの事物を組み合わせる(=切れがある)」と述べた。切れは一ヶ所のみである。もし一句が二ヶ所で切れたら、三段切れと言われる。PQRとでも表せるだろうか。一ヶ所で切るからこそ表現上の効果が生まれるわけで、三段切れは通常いい句にならない。⁵⁾ 季語と組み合わせる材料の12拍は一続きでなければならないのだ。12拍がしっかりつながらず、三段切れになった例を挙げる。

(19) 孤独猫取り立て魚五月雨 (10年度)

(20) 屋根の上トマト切る強い春風 (09年度)

(21) 蟬の声自転車帰り修羅の道 (09年度)

(22) 子が笑う蚊は翼なし日雷 (10年度)

(19) の季語「五月雨」に組み合わせた材料は[主体+動詞の連用形+動詞の補語]という構成だ。その結果、材料が「孤独猫取り立て／魚」と二つに分かれてしまっている。連続した12拍構成にするにはどうしたらいいか。動詞を連体形「取り立てる」にして連体修飾節とするか、[主体+補語+動詞]という通常の語順「猫(が)魚取り立て」とすれば、12拍が切れずにつながる。「猫が魚を取り立てる」という動詞の選び方も不自然なので、「捕る」か「ねらう」に置き換えるよう指摘するが、それは語彙の問題である。まず構文の問題を優先した。

(20) は「春風がトマトを切る」とは考えにくいので、まず「強い春風」の前で切れていると見なす。「屋根の上」は「トマト切る」に対して場所を表すと思われるので、「屋根の上で(または「屋根の上に」)」とマーカーを補うか、連体修飾節の「トマト切る屋根の上」とすれば、一続きになる。原句では上五と後続部分の連続性がはっきりせず、「屋根の上／トマト切る」と羅列されたような印象を受ける。

(21) は作者に確認して、「蟬の声」が背景で、「(上り坂を) 自転車で帰るのは修羅の道(のようにしんどい)」という句意だとわかった。坂の大変さを日々味わっている学生たちの間ではそれなりの共感と呼んだが、そういう予備知識なしに読むと、「自転車帰り」と「修羅の道」の関係がよくわからない。「自転車を押す」と推敲すれば、連体修飾節となって「修羅の道」とのつながりがはっきりする。(22) の句も、「子が笑う／蚊は翼なし」と三段切れにとれる。「子どもが蚊の羽をむしりにとって楽しんでいる」ということを言いたかったそうだが、そういう内容の不穏さを演出するなら三段切れは合っていないくもない。

着想を12拍にまとめるために何となく短縮したり、省略するのではなく、どのように単語が並べば一続きにつながるのか、それとも切れるのかという点に注意を払った方がいい俳句になる。そこで、文法の知識が問われるのだ。句読点も分かち書きもなくて一見簡単ではないが、口頭表現も句読点に当たるものはなく、散文のようなきちんとした修辞ではない。聞き手は文法と文脈を頼りに分節し、理解している。俳句では会話ほど前後関係に頼れないが、短いせいもあり、文型・文法は複雑ではない。このような力は俳句だけではなく、論文の見出しや、ブログ記事のタイトルをつける際にも生かせるのではないだろうか。

4.6. 季語の提示と季語観の違い

近年、Web上の画像・動画検索サイトを利用できる環境が整備されてきた。おかげで、季語や関連事象が格段に紹介しやすくなった。⁶⁾「雲」を例にとると、日本には「入道雲」「いわし雲」など、季節を象徴するような雲の種類がある。「雲の峰」という季語が話題に上った時、スウェーデン人学生から「自分の国では、季節によって雲の様子が違うという印象はない」と発言があった。それが気候の違いか意識の違いか筆者も含めて明言できるものはなく、学生の頭の中の概念はまだ漠然としていた。だが、いったん夏の雲の動画を再生して、湧くような雲の特徴を見ると、「雲の峰」という概念が俄然実体を伴って掴めるようになる。

反響が大きかった季語は「うぐいす」である。特に非漢字圏の学生たちは英語訳のJapanese warblerなどを見て、首を傾げることが多い。ところが、動画を再生して、鳴き声を聞くやいなや、一斉に笑い出す。筆者は知らなかったが、大阪モノレールの駅の音響案内として流れているそうだ。⁷⁾ 学生たちにとって、名前や姿は知らないが、モノレール構内で聞き慣れている声なのだ。このように、本物にふれるより先に、録音、フィクション、ネット経由の知識を持つということは留学生だけにとどまらない。自然を保護し、昔ながらの伝統を保存しながら生きる現代人なら誰でも心当たりのあることだろう。また、自然のうぐいすが早春から夏にかけて鳴くのに対し、この案内は一年中変わらないそうだ。自然本来の季節感を大切にする日本でもこのような不自然な演出があることが印象に残ったようだ。ともかく、日本では春を告げる鳥として身近な鳥であること、鳴き声が「ホーホケキョ」という擬音で表されることは知っておいてもらいたいと思う。

一方、画像を見せて事足りるわけではない項目もある。時候・天文がその一つである。『入門歳時記』の「朧」の項には次の記載がある。

春の夜のかすんでいる現象をいい、(中略)特に朧月は、薄絹のかかったように柔らかい感じが好まれて、そのほのかな明るさの夜を楽しむのが風流とされている。

09年度、「朧月」の画像を受講生に見せて、いつの季節の月と思うか尋ねたが、判断がつかない様子だ。「このような月は春によく見られます」とこちらの主張を通してしまったが、画像があればわかりやすいはずという筆者の先入観のせいで、大事な点を見落としていた。歳時記の中では、春是水蒸気の多い朧の月を、秋は空気が澄んでいる、いわゆる名月を思い浮かべがちだ。しかし、秋にも水蒸気が多い状態はあって、それは「霧」と、別の名前で呼ばれる。客観的にはほぼ同じ現象なので、画像を見るだけでは区別は難しい。同じような現象を、「朧」「霧」と区別する季節感にこそ、注意を喚起すべきだった。あるイギリス人学生はレポートに「イギリス人にとって、朧月夜を聞いた時に、切り裂きジャックを思い出すかもしれない」と書いた(10

年度)。「おぼろ」のはっきりしない感じを柔和ではなく、否定的にとる考え方に虚をつかれた。動画や画像によって提示する場合、その効果を過信しない方がいい。視聴覚に訴えるので、共通理解できたような気になるが、文化的意味まで共有できるとは限らない。

10年度の授業では、風鈴を持ち込んで窓に吊るした。画像や動画もいいが、実物に優るものはない。そして、風鈴を題材にした句が詠まれた。

(23) 奥道に踊り立つちり風鈴の音 (10年度)

この句は二人が選び、それぞれ感想を語ったが、どうも風鈴の場所を玄関、または外として鑑賞しているように聞こえる。その後、課題の鑑賞文で次のような箇所が見つかった。

- ・風鈴は風で鳴るだけではなく、お店のところもお客様が入ったら、時々風鈴が鳴るのでしょう。お店さんにとっては、風鈴はいいものではないか、なんか期待の気持ちがあるから。(中国人)
- ・中国の夏は日本ほど蒸し暑くはありません。そのため、特に中国の北方の風鈴は、日本の風鈴が持つ夏のイメージが弱い。最近あまり見えなくなっています。そして、迷信により、風鈴が人々の魂をあのに呼ぶ作用があり、自分の家の窓際や軒先にかけるとは不吉なイメージがあることを信じる人までもいます。(中国人)

この感想を読んだ次の授業で学生たちに確認してみると、全員ではないが、風鈴を店舗などの玄関のベルだととる連想が一部に見てとれた。玄関ベルは風で鳴るものではないと思うし、何より窓辺で鳴っている実物の風鈴を体験したばかりなのに、こんな解釈が出るのが筆者には軽い驚きだった。風鈴の歴史を遡れば、中国伝来の風鐸にたどり着くようだ。また、西洋にも wind bell, wind chime と呼ばれる物はあるのだが、日本文化における風鈴にまつわる郷愁や涼感などと等価の風情が付随しているわけではないのだろう。

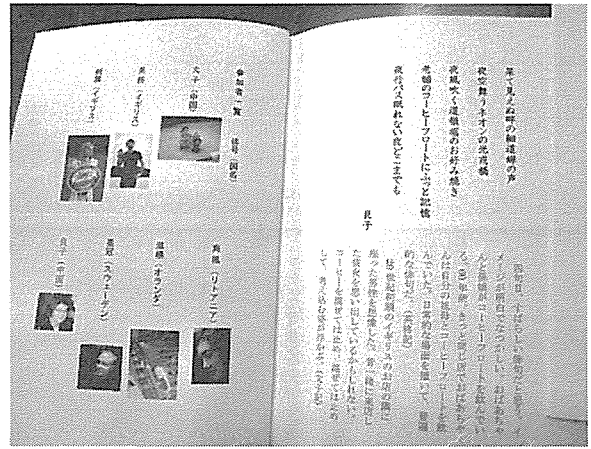
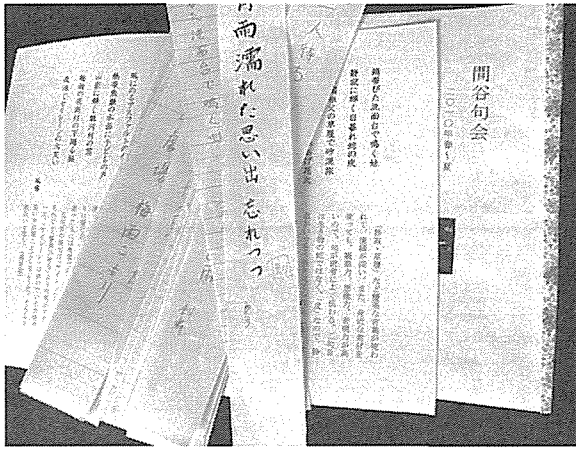
以上、画像・動画、実物提示の効果と注意点について述べた。「蛩」「うぐいす」など、動画サイトによる恩恵が非常に大きいものがある反面、画像・動画が万能ではないことがわかった。その両面をはかりながら、有効に活用したい。

4.7. 作品アンソロジー

期末の課題として、詠んだ俳句のうちから自分の代表句を5句ずつと、他の受講生の作品への評を提出する。それを講師が編集し、そのクラスの作品集を製作した。縦組二段の上段に各学生の代表句5句を、下段に他の学生からの評を載せるレイアウトで、一人当たり1ページずつのごく簡素な冊子だが、作者一覧紹介の最終ページにはそれぞれの写真(各自提出の画像データ)も収録し、印刷して配布した。書道や折り紙などが、帰国後言語の壁を越えて披露できるのに対し、俳句はせっきくの創作作品であっても、日本語が読めない人にはアピールしにくい。冊子化することによって、授業の目標の一つである「各自の俳句作品を形に残す」ことができるだけ実現できていけばと思う。

5. 受講生の感想

期末に、独自の授業アンケートも行った。できるだけ本音を拾いたかったので、ワープロ入力後、印刷した用紙、またはデジタルデータをパソコン上で提出してもらい、筆跡で記入者が特定されないように回収した。結果、10年度は6名分の回答を得た。以下に概要を示す。⁸⁾



5.1. 難しかった点

「俳句を作っていて次の点はどのぐらい難しいですか」という問いとともに、予想される項目例を並べた。「どのぐらい」と尋ねているので、「少し」や「かなり」など程度副詞をつけた回答があった一方、自分が難しいと思う項目のみ選択した回答や、記述式の回答もあった。ひとまず「難しい」にせよ、「難しくない」にせよ、明記された回答を集計する。

・材料を思いつくこと	難しい 2名	難しくない 1名
・助詞	難しい 3名	難しくない 2名
・語順・構文	難しい 2名	難しくない 1名
・語彙の選び方	難しい 2名	難しくない 1名
・季語の選択	難しい 1名	難しくない 1名
・俳句の短さ	難しい 2名	難しくない 0名
・5・7・5の型	難しい 2名	難しくない 0名
・その他（自由回答）「読んでいる人の興味を引けるような俳句を作る」	難しい 1名	

「難しくない」という回答の代わりに、「俳句の短さ」を「（自分の国の詩と比べて）すばらしい」としたり、「語順・構文」について「パズルのようで楽しかった」と書いた回答があり、それらは上に数えていない。「難しい」という回答が目立ったのは、「助詞」「着想を得ること」「語順・構文」「語彙の選択」「俳句の短さ」「定型」であった。回答者のうち、半数が難しいと回答したのが「助詞」だが、4章の脱落以外、助詞は個別の指導しかできなかった。たとえば、「に」「で」「を」などの意味の本質に迫るような指導がしたいところである。今後、その可能性を探りたい。なお、「助詞」に対しては「難しくない」という回答も2名、と比較的多かった。

5.2. 楽しんだ点

「次の点はどのぐらい楽しい／興味深いですか」という問いとともに、予想される項目例を並べた。「難しさ」と同様に集計した。

・句を考えたり、作ったりすること	楽しい 6名
・句を出すこと	楽しい 4名

・句を選ぶこと	楽しい 4名
・選んだ人のコメントを聴くこと	楽しい 5名
・自分が選んだ句についてコメントすること	楽しい 4名
・先生のコメントを聴くこと	楽しい 5名

幸い、否定形の回答はなかった。回答者全員が俳句を作ることが楽しいと答えたのもさることながら、多くの学生が他者の句の鑑賞についての過程も楽しいと感じられたのがよかった。「俳句の感想を語り合い、鑑賞とコミュニケーションを深める」というこの授業の目標をある程度達成したのではないかと思う。それぞれの項目について「役に立った・興味深い」という回答も見られたが、概ね「楽しい」という答えが目立った。

5.3. 句作・鑑賞の変化

「初めのころと最近と比べて、俳句の作り方は変わりましたか。理由も書いてください。」という問いに対し、「以前より慣れてできるようになった」のような、予想通りの回答が多い中、次のような回答もあった。

- ・最初は古くて、伝統的なことばを使いましたが、最近は身近なことへ変えました。
- ・もともと俳句のイメージはきれいな言葉を使って、伝統的な日本について書くことだと思った。今、俳句を作る時に材料と選び方が簡単になって、テーマとして何でもいいです。

「俳句は侘び寂び、風流なもの」という固定観念が強いため、いかにも俳句らしい内容を俳句らしい修辞（「狭庭」のような詩歌独特の表現や文語体を使ったりすること）でまとめようとする人が日本語話者でも多い。この授業では紹介する例句を通して、俳句の内容は幅広く自由であり、侘び寂びだけに限らないと伝えている。09年度のアンケートでは「伝統的な俳句について（もっと）習いたかった」という感想が出た。そんな志向があることも受け止め、それぞれの作風を尊重し、バランスを考える必要がある。

「以前と比べ、俳句の読み方は変わりましたか」という問いに対しては、「だいたい解釈できるようになった」「少し解釈できるようになった」の答えがそれぞれ3名ずつだった。俳句の字面を読み、さらに直接書かれていないことまで読み取ろうとする意識化が進んだと考えられる。その結果、散文の読解などにも波及効果をもたらすようであれば、俳句学習に実践的効用があることになるが、その検証のためには長期的かつ大量のデータが必要になるだろう。

5.4. その他の感想

自由記述欄からは「欧米の作詩を読むのも好きですが、私にとって自分で美しい景色などを表したい時、俳句のほうが似合っているという気がします」「毎週の授業をわくわくしながら待っていた」「もっと俳句を発表したかったのに紙が足りなかった」「最初から先生が句を選んだらもっと楽しくなると思います」という感想が得られた。09年度のアンケートでは「俳句を考える時間が授業中にもっと欲しい」「一つの同じ題で作って比較したら面白いのではないか」という感想を得た。

5.5. 日本語力と俳句

最終回の授業で「日本語レベルの高い人の方が俳句が上手だと思うか」と尋ねてみた。どの

学生も「そうとは限らない」と答え、筆者も同様に感じた。語彙の豊かさや文法知識の正確さは有利に働くはずだが、日本語レベルが高い方ではない学生たちが高評を得る句をいくつも生み出した。選評後、作者が名乗ると「やっぱり」「えー！」という声が上がったり、誰かが作った俳句をヒントにして新作を考えたりすることも多かった。規範の模倣に偏りがちな語学学習の中で、俳句は学習者が創造性を発揮できる貴重な機会になる。互いの作品と鑑賞を通して、通常の日本語運用とは別の次元で大きな刺激を受け、あるいは自信を得ることができたようだ。

6. まとめにかえて

俳句学習の意義といえば、音韻面や日本文化理解が挙げられるのが常であった。実際、日本文化紹介では一定の成果が見られた。こちらが紹介したいと思う季語と、学生が俳句に取り入れやすい季語が両立しないジレンマもあったが、日本文化の理解を深めつつ、日本文化から照射される自文化についてもクラスに還元するよう促した。

この報告では、俳句学習の意義が文法面に関してもあるという仮説から出発して、考察を試みた。その結果、助詞の序列、そして、句読点のない俳句においてつながりや切れを意識する点などに文法力の必要性を見出した。アウトプットからフィードバックする度に「切れがあるか、材料は連続しているか」と問いかけ、修正を提案することで、構文への意識を高めるようにした。

論文や意見文と異なり、詩的表現の教育の方向性は幅があるので、この報告とは違った展開ももちろんあり得る。この授業ではよりよい表現、よりよい俳句を志すあまり、指摘することが多くなり、外国語で詩を作ったことをとにかくほめて動機づけるという姿勢が足りなかったかもしれない。課題は残るが、いい俳句作品が少なからず生まれたというその一点をとっても収穫が感じられた。感謝をもって結びとしたい。

注

- 1) コロンビア大学日本語科3年生は俳句・川柳・短歌の作品を毎年ネット上に発表し、読者投票によって優秀作品が選ばれている。
- 2) 既発表俳句は作者名とともに引用する。受講生の作品は受講年度のみを示す。断りがなければ出句段階からの引用とする。
- 3) 川涼み話し相手は水馬（09年度）
たとえば上の句は「川涼み」でいったん切れ、「水馬を話し相手のように感じる」という別の事柄が組み合わせざっと捉えられなくもない。一方、「川辺で涼む主体の話相手は水馬だ」と読めば、一連の同じ事柄ともとれる。このような句は中間的な構成として対象から外し、はっきり区別のつく句のみ集計した。
- 4) いわゆる「ガノ可変」の「の」も脱落可である。また、「が」「を」が脱落可能、という線引きは目安であり、脱落の許容度は文脈にもよる。
- 5) 現代俳句協会公式ホームページの「俳句入門」では、三段切れについて「この形はばらばらな印象を与える、中七が上に付くのか、下に付くのか判らないなど、多くの欠点を持っていますので、普通は禁じ手とされています。（中略）切れのない俳句は、だらだらとしたものになるだけでなく、俳句にとって大切な余韻や飛躍がないこととなります。」と書かれている。

- 6) 動画を講師が一つ一つ準備するには大きな労力が必要だが、センターの無線LANを利用して、オンライン動画サイトを閲覧できたのが非常に大きかった。
- 7) 大阪モノレールのホームページには「視覚障がい者に対する音響案内で、(中略) 混雑の中でも聞き取りやすさを考慮したウグイスの鳴き声が選定されています。また、自然のウグイスと区別できるようにウグイスだけでなくホオジロの鳴き声とを併用し、一定間隔で連続して流しています。」とある。
- 8) 09年度のアンケートは自由記述が多くて数字ではまとめ切れなかった。紹介可能な部分のみ引用する。

参考文献

大野林火 (1980) 『入門歳時記』 角川書店

上迫和海 (1992) 「初級後期学習者への俳句指導」『平成4年度日本語教育学会秋季大会予稿集』

佐藤路子 (1995) 「俳句を教える—日本語教育の立場から—」『日本語教育』86号

(こばやし かなこ 本センター非常勤講師)